

【R.I.P.】 Roy Hargrove 海野雅威～ロイ・ハーグローヴ追悼文

Memorial Statement to Roy Hargrove by Tadataka Unno

2018年11月2日（米国時間）、悲しい知らせが全世界を駆け巡った。それは、ジャズ・トランペッターのロイ・ハーグローヴが突然この世を去ったという訃報だった。ロイは亡くなる直前まで、自身のクインテットを率いて世界中をツアーブーしていたが、そのクインテットのピアニストは海野雅威さん。

2016年、ニューヨークで活動していた海野さんが、ロイのクインテットに史上初の日本人レギュラーメンバーとして迎えられたのだ。ロイのクインテットで躍動する海野さんの姿は今でも昨日の様に思い出される。その海野さんが本誌のために特別に現代最高のトランペッター、ロイ・ハーグローヴへの追悼文を寄せてくれました。（加瀬正之）

時代を代表する偉大なアーティスト、トランペッターのロイ・ハーグローヴが昨年11月2日、天国へと旅立ちました。私はつい先日まで共に世界中をツアーブーで廻っていて、ロイはエネルギー溢れる意欲的な演奏を続けていましたので、まだその死が信じられない気持ちでいます。

ビル・エバンスが盟友スコット・ラファロを突然失った後、数年間演奏する気が無くなってしまったという話がありますが、今はその気持ちが少しわかるようにも思います。もっとロイは演奏を続けたかっただろう事を思うと悔しい思いが募ります。私は心にぽっかりと大きな穴が空いてしまったかのような感覚です。「スピリチュアル・コネクション」（魂の交流）がなければ何も意味を持たない、とロイは言っていましたが、今までにこの事を痛感します。私はロイと共に演奏しながら音楽を通じて魂の交流をしていたのです。



この大きな喪失感はすでに自分の中の大切な魂の一部になっていたロイとの交流ができない事によるものだと、ロイが亡くなつてこの事に深く気がつかされました。あの優しく切ないロイの深い音色は、もう二度とライブで聴く事が出来ません。

たとえ現代最高のトランペッターが何人束になって演奏しても、ロイのたった一音の前に震んでしまう、、、というのはわかる人にはわかるようです。これは魂の次元の話としか形容できないもので、いくら経験を積んで練習を積もうとも得られない、すでにロイが生まれながら授かっていた「何か」だと思います。本当に心から歌っているのかどうか、シンプルな時こそ誤魔化しがきかず丸裸にされます。トランペットに限らず全ての楽器に通じる事です。派手に目立つ事が自己表現として凄いと感じてしまいがちですが、何かを誤魔化す派手さも存在します。



ブルーノート東京の楽屋で談笑するロイ（2017.3.3）

逆にシンプルで普通である事、飾らず自然である事の難しさ。ロイは自然でさりげないほんのたった一音だけで、雰囲気をガラッと変える事が出来ました。私にとってはこれこそ本物のジャズだと感じています。

私の師匠ハンク・ジョーンズもまさにそうでした。ところでハンクは、姿勢を崩しながら不自然な動きで、美しくない音を奏でるミュージシャンについて、「第3次世界大戦の音がしている」と冗談で苦笑いしながら、「楽器が可愛そう、鳴ってない、歌っていない」と言っていた事があるんですよ。ハンクが何気なくポロッとシンプルに弾く音は、無限の広がりを持つかのように美しく、そして誰よりも雄弁に歌うピアノがそこにはありました。

ロイの演奏からも同様にいつもこの事を感じてきました。ですから演奏する姿も大変美しいもので、品格がありました。その上で、ロイは誰よりも歴史（ジャズを築いてきた自



ブルーノート東京にて、ロイ・ハーグローヴ・クインテット、左から海野雅威、ジャスティン・ロビンソン、アミーン・サリーム、ロイ・クインシー・フィリップス（2018.3.1）



分より上の世代）への敬意を心から持っていましたので、多くのレジェンドからも心から愛されてきました。天性の魂、センスと歌心に加えて、現場で上の世代から直に学んできた経験、謙虚に音楽と向き合う姿勢。こうして天才トランペッターは誰よりも音楽の神に祝福され、必然的に誕生したのだと思います。

私は2年間、一度たりともロイから「俺を誰だと思っているんだ！」というようなエゴを感じた事がありませんでした。ある時、イスのラングナーのジャズフェス会場の売店で売られていたTシャツのデザインをロイがとても気に入り、スタッフからプレゼントされて早速嬉しそうに着ているのを見てくれた事がありました。その時「タダ（私のニックネーム）も行けば貰えるから行ってこいよ、でももし貰えなかつたらその時は俺が一緒に行つてやるぞ。俺のスターオーラを使えばゲットできる（笑）」と、ロイ本人が冗談で笑いながら言っていた思い出があります。周りにス



スイス、ラングナージャズナイト、アフターアワーズセッションにて ロイとのデュオ
ロイはこの日、珍しくサングラスをかけていなかった（2017.7.28）

ターだと思われている事は承知でも、実際本人はそんな事これっぽっちも思っていないのは明らかでした。

ロイの天才的エピソードは数え切れない程ありますが、演奏中に誰が何を弾いているかを全て同時に聴く耳を完璧に持っているのは序の口で、新曲をサウンドチェックでメンバーに伝える時、ピアノがあれば楽器を弾いて、無くても歌ってピアノパート、ベース、サックスハーモニー、ドラムのフィルについて的確に伝えていきました。（ロイはピアノ、ベース、サックス、ドラム、全て演奏できました。時には移動中にメンバーに曲を教えていた事もありました。）曲のイメージが頭に完全に入っていて、どうやって伝えたら最短で分かりやすく伝えられるかも、ロイは本人の課題としていたようで、教え方にも愛情が感じられました。

「何回やったら覚えられるんだよ」という態

度を見た事がありませんでした。メンバーは物凄く集中して、できれば一度で覚えようと食らいついていき、おかげでリズム、ハーモニー、メロディーをすぐに聴き取る耳を鍛えられたと思います。最高レベルのイヤートレーニングクラスに通ったかのようでした。

楽譜をロイからもらって譜面で覚えた事は一度もありません。私にとって一番大変だったのは、メンバーになったばかりの頃、優に200曲は超えるレパートリーを同時に覚える事でした。サウンドチェックで新曲を次から次へと10曲単位でロイから教えられた時、どうしても最後に教わった曲の方が印象に残り、初めの方で教えられた曲は忘れてしまうと言った事も。

さて、今晚はどの曲を実際演奏するかとドキドキしていると、全くその晩は新曲を演奏しない（苦笑）といった具合です。しかし、半年後に突然今まで本番で一度もやった事



スイス、ラングナージャズナイトにてロイのクリニック
ロイとジャステインのフロントは最高のアンサンブルを聴かせた（2017.7.26）

のない曲の数々を、「教えたよな」と本番で突然演奏し出すのです。一度でも教わったらその後いつでも万全で無くてはいけない厳しさを学びました。と思ったら、ロイしか知らない私のオリジナルを突然演奏してくれて、ジャステイン・ロビンソン、アミーン・サリーム、クインシー・フィリップスが「？」でついていけなかつたり、ロイは飴と鞭の人でした。

曲と共にタイトルも必死で覚えました。（厄介な事にタイトルが後々告知なしに変わることもしばしば）バンドでは一番新参者の私でしたが、タイトルと曲をきちんと覚えようとしていたので、他のメンバーにかなり頼りにされました。ロイが普段やらない曲を突然コールし、カウントし始めるとき、「何だって？タダ助けてくれー！」という慌てふためいた彼らの顔は傑作でした（笑）

後編に続く

(Photo by Sayaka Unno)



夏のヨーロッパツアー最終日、フランス、マルセイユにて、
ロイはいつも見守ってくれていた（2018.7.26）